
雷炎を纏いし者

神龍白夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷炎を纏いし者

【Zコード】

Z0811M

【作者名】

神龍白夜

【あらすじ】

特SISUランクの強さを持つ少年、真田幸村はいつも道理任務をおえ、帰ろうとするが、そこには銅鏡があり、光に覆われたと思ったら恋姫の世界に！？かなりチートな彼が引き起こす物語の開幕

プロローグ（前書き）

初めての投稿ですのでよろしくお願いします。

プロローグ

「…………」

澄み切った空の下、15歳程の少年は立っていた。

「今日も空が綺麗だ」

空に向かい、手を伸ばす。

彼の名は真田幸村、特SSSランクの強さを持つこの世界でたった一人の逸材だ。

幼い頃に『天賦の才』を見い出され、この世に存在するあらゆる武術を叩き込まれた。

赤をベースに金色で刺繡された六文龍錢が付いているマントを侍る。服とズボンは赤と黒を強調した中華服のようなものでポリエステルのため日光を反射して輝いている。

「幸村」

「また依頼ですか？」

「うむ、今回是中国に行つてこの資料に載つてゐる奴の暗殺が依頼だ」

つたく俺は何でも屋じゃねえんだぞ！

「なんかいったか？」

「何にもいつてねえよ」

「まあ良いだろ？、せつせと行くんだな」

「チツ
・
・
・
・
」

地面に突き刺していた愛槍『龍閃』りゅうせんを抜き取り、歩き出す。

「雷の道標」

ライティング口語文

幸村は身体に雷を纏い、勢いよく踏み込む。すると、地面が抉れ超高速で幸村は駆けていった。

「やつに立たない」

あれから、船に乗り中国にやつてきた幸村は早速仕事にひつる。

ます、最初は・・・・・

渡された書類には計5人の名前と写真等が写されていた。
夜の闇に紛れて着実に任務をこなす。

(ああ～くそつめんどうくせえなあ)

ザシユツ!!

「まてつ！頼む助けてくれ！金ならいくらでも用意する……」

• • • • • • • • • • • • •

ドスッ！！

「ぐええ！！」

「これで、最後か・・・・」

写真に印を付ける。

「うん？」

（「なんとこりに銅鏡なんかあつたけ？）

ピシッ！

うおっ！なんかヒビ入った！
ちょ、なんか光りだしたんですけど・・・・だんだん強くってええ
ええええ！・・・・！

光が収束したときには幸村の姿はどこにもなかつた。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

コメントをよろしくお願いします。

来ひやこました異世界（前書き）

一一作目です。w

来ちゃいました異世界

うん落ちてるね、俺

ケンケンと風を切りながら落せていく

忘れてたせ
よくあることだよなナゼなどきはと忘れやるのうて

——傳する方猶々之の如き——

主機が口に出でて、音中の通りが方から出でて、音

八十一

ふう、これで大丈夫だな」

「うん？ ちょっと待て・・・なんか見えてきた・・・屋根？ で
かいなつて城！？」

羽を広げるのが遅すぎて屋根に激突して破壊しながら落ちていく

「イテツ！イタツ！！木が木片が刺さる～！～！」

「「「「「「！」ハツア！－！」」

幸村は身体に雷を纏い当たつてくる木などを一瞬で塵とかす。

「ドンッ！－！」

「ツ～～～～やつと抜けた」

最後の壁を突きぬけ広場みたいなところに出たところで再び羽を羽ばたかせ地に下りていく。

「つと・・・・・あれ？」「は？」

羽を消し辺りを見渡すと褐色の美人のお姉さん達とその周りで剣を抜いて構えている女性これまで美人がこちらを睨んでいた。

「－－－－－はい」これが最後です。」

玉座の間に響く澄み切つた声。

「紅蓮様？聞いておられますか？？」

紅蓮と呼ばれた褐色の女性は此処、建業の江東の太守『孫堅文台』と言つ。

「聞いているぜ冥琳、だから耳元で大声だすな」

冥琳と呼ばれた女性は『周瑜』の孫吳の大都督である。

「まだ終わんないの～？」

「「」策殿、いまは朝議中ですぞ」

「祭はそつまうナビ実はめんぢくせこんでしょ？」

「雪蓮姉さま……」

「なによ～蓮華まで～」

祭と言われた女性は『黃蓋』宿将として名を馳せている。雪蓮と呼ばれた女性は、紅蓮の娘で長女の『孫策』といつ。蓮華と呼ばれた女性は雪蓮と同じく紅蓮の娘で次女の『孫權』と言う。

この部屋には他にも穂こと『陸遜』亜シHと『呂蒙』思春Hと『甘寧』明命こと『周泰』小蓮こと『孫尚香』がいる。

ド「ゴンシ……ガガガガガッ……

「なんだ！？」

全員が臨戦体勢をとる。

「母さん……」

「分かっていろー上からだー皆『戻をつけなー』

ドンッ！……！

「 「 「 「 はつ？」」」

天井を突き破つて出てきたのは輝く羽を広げ体に雷を纏つた男だつた。

えーと俺は今大変な事になつてゐるのか？

なんか椅子の前で立つてゐる人なんかお偉いさんぽいし・・・・・

「あ、あの～」

わお俺の声で我に返つた美人の女性達が殺氣を放つてきましたよー！

「貴様何者だ！」

釣り目の女の子が聞いてくる。

だけど初対面の人に対しても失礼じやないかな？

「人に名を尋ねる時はまず自分から名乗るほうが礼儀だろ？」「

「キサマツー！」

湾曲した刀を逆手に持ち斬りかかつてくる。

「本当に礼儀がなつてないな・・・・・」

だけど剣を向けるって事は・・・・・

「死ぬ覚悟はできてんだろ？なあ？」

瞬間、幸村の身体から殺氣・霸気が溢れ出す。

「出でよ我が剣『龍閃』！－！」

幸村の左手から光が溢れ出しどんどん槍の形になり、最後に大きく光ると幸村の手には雷と炎を纏った槍が握られていた。

来ひやこました異世界（後書き）

異ルートで行きたいと思います　ｗｗ

来ひやこもした異世界 中篇（前書き）

ふふふ

「なつ！」

「今どこから、槍をだした！？」

「さあ始めようか・・・・・」

雷炎を纏いし槍を構える

「グツ！」

その瞬間、思春に禍々しい殺気が襲い掛かる

「やつちから来ないのだつたらこいつちからいへやつーーー！」

ダンッ！

幸村は地面を大きく蹴り、間合いを詰める。

シコッ！

ガキヤン！—！

「ぐうううーーーー！」

今を受け止めるんだ・・・・・・できるな

「今を受け止めた」と纏めてあげるよ・・・・だけば次はびつか
な？」

バイバチッ！－！

「フッ－－」

シユシユシユッ！－－－

「なあ－－」

ガキヤンガキンッ！－－！

思春は手から得物が飛ばされる。

ビュンッ！－

「ツ－－」

頸もとじっかりと槍の矛先を向ける。

「終わりだ・・・・・・・・

幸村が思春の頸を切り落とそうとする

「まてつ－－－！－！－！」

響き渡る声

「我が名は孫文台－孫吳の王なり！」

その名を聞いて幸村は驚愕する。

確か俺の知ってる孫堅つておどりだったよな？」

「あ”あー!?」

とりあえず威嚇してみる

「槍を取めてくれんか? そいつは私の大事な仲間であり、家族なんだ」

『家族』と叫び言葉に幸村は反応し、槍を消す。

「チツ・・・・・・すまないな、怪我してないか?」

幸村は尻餅をついている思春へ手を伸ばす

「あ、ああ・・・・・・／＼／＼(なんだこの胸の高鳴りは)」

その手を思春はとり立ち上がる。

「感謝する。」

孫堅はそう言つと幸村の方へと歩いていく

「か、母様危険ですーーー!」

「紅蓮様つーーー!」

「母さんーーー!」

「堅殿！」

孫堅の家臣達が引き止めているのにもかかわらずズンズンと近づいてくる。

そして幸村の前まで来るとその瞳を見つめる

「一つ聞くがお前は何者だ？」

何者だと言われましても・・・・

「俺の名は真田幸村、出身は日本おそらく俺はこの世界の住人じゃない。」

てか、孫堅って超美人なんですかビー！

「姓が真、名が田、字が幸村か？」

「いや、姓が真田、名が幸村だ。この世界で言つ子はない」「つむ、じゃあさつき言つてた『この世界の住人じゃない』ってのはどういうことだ？」

「ああ、今は後漢王朝で皇帝は劉宏様であつてるよな？」

「なにを当たり前のことといつてるんだ？」

「ありがと、要するに俺は今から一八〇〇年も未来からここに來たつて事だ。」

「未来から？」

あちやー是は信じてないな、まあそれが普通だけど

「まあ信じるか信じないかは君しだいだけどね、孫堅様（二二七）」

見たもの誰もが惚れそうな笑顔を向ける。

顔が赤いけどまあいいか

「まあ証拠までとはいえないかも知れないけど眞に仕えている武将をある程度は言えるよ」

「ほう・・・・それは本当だな」

すると今までこちらを睨んでいた黒髪の女性と桃色の髪の女性がこちらに寄ってくる。ただし、警戒は解いていない

「期待しないでくれよ？まずは、孫堅の娘？かな孫策に孫權、孫尚香、武將の黃蓋、甘寧、周泰、軍師の周瑜、陸遜、呂蒙まだまだ言えるけど主な武將はこのくらいかな？」

幸村が言い終え孫堅たちを見ると全員が驚愕の色に顔を染めていた

来ひやこねした異世界 中篇（後書き）

「メンテナのじへお願いしますかーー！」

来ひやこました異世界 後編（前書き）

久しぶりの更新

長らくお待ちをせつてすみません！

「えーと」

何か悪い事でも言つたかな?
なんか皆黙つてるけど・・・

「本当に天の御遣いらしいな」

天の御遣い?

「その天の御遣いってなんだ?」

「知らんのか?今民の間で有名な話じゃ・・・黒天を切り裂いて天
より飛来する一筋の流星。そして流星は天の御遣いを乗せ乱世を鎮
静す。とな」

「俺、そんなたいそうなもんじゃねえぞ?」

しかも俺は殺し屋だしな

「しつかしなんで俺はタイムスリップしてきたんだ?・・・」

やはり、あの銅鏡が原因だよな・・・それしか考え切れん。

「たいむすいっふ?なんだいそれは?」

「たいむすいっふじゃなくてタイムスリップね。今さつきも行つた
とおり1800年も未来から來たんだよ。」

「紅蓮様。」

「分かつてゐる。なあ真田殿

「あん?」

「家族は?」

「うんなんもん最初からいねえ

「すまない。・・・・寝どりじめ?」

「やうり泣きでも寝れる

「食は?」

「山と川で狩る

「行く宛ては?」

「ないな・・・だがプログラマするのもまたいいな

「うん。今考えると向もないな。
まあ向ひの世界でも同じだったけどさ

「ならワッヂチ達の所に来ないかい?」

「母さあー?」

「幽さん…？」

「ふむ、なるほどのう」

「天の御遣いかも知れない俺が君達の仲間になるだけで、民からの支持が上がり、名を広める事が出来るからか？」

俺が言うと、冥琳と呼ばれていた女性が驚いた表情をするが直に笑みに変わり、

「ほうよく分かったな・・・じつやう武だけではなく智もあるようだ。

」

「で、じつだい？ワッチ達の仲間になりやせんのかい？」

そうだなあ、行く宛ても決まってないし・・・字は読めるだろうけど金もないしだラブララしてるので嫌だし・・・まあいいか。

一番安全だらうしね。

「分かった。俺は君達の仲間になるよ。分からぬこともあるだらうけど宜しく頼む。」

いつして俺のこの世界での人生が始まった。

来ひやこました異世界 後編（後書き）

孫堅の口調を変えました^ ^

感想などがあればじやんじやん送つてくださいね^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0811m/>

雷炎を纏いし者

2011年1月12日10時34分発行